

『ナルニア国物語』－キリスト教的世界観を中心に－

金山愛子

はじめに

C. S. ルイスの『ナルニア国物語』(*The Chronicle of Narnia*)は、近年のファンタジー・ブームおよび2005年の映画化で、再び注目を集めている⁽¹⁾。出版直後から本シリーズは大変評判がよく、『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956)は、前年度に出版された最高の児童文学に授与されるカーネギー賞を受賞し、このシリーズはこれまでに全世界で8,500万部の売れ行きを記録している。他方、「宗教的寓意を振り」かざしているとの手厳しい批判もある⁽²⁾。中世文学を中心としたアレゴリー(寓話)研究者であるルイスは、『ナルニア国物語』をアレゴリーであるとする解釈に対しては常に否定的である。彼にとって、アレゴリーと神話にははっきりとした違いが存在する。彼によれば意味づけできる物語がアレゴリーであり、神話では読者は意味を探すのではなく、その世界は「味わう」ものなのである⁽³⁾。さらに批評家がアレゴリカルな意味について性急に臆断を下すのは誤りであるという立場に立っている。彼は批評する上での注意点を以下のようにあげる。

(1)、まず第一に、どのような作品であれ、他の人によってアレゴリカルな解釈を加えられないものはない—ということを銘記する必要があります。古典神話に対するストア派の解釈、旧約聖書に対するクリスチャンの解釈、中世人の古典解釈等、いずれもこのことを証しています、(2)、したがって、ある作品をアレゴリーとして解釈できるという事実だけでは、それがアレゴリーだという証明にはなりません。もちろん、アレゴリーとして解釈することはできます。芸術においても、実生活においても、あらゆるものをアレゴリーと見なすことができるわけですから。(中略)そうする理由を明確にあげた後でなければ、どんな作品にしる、アレゴリーと見なすべきではありません。(「批評について」)⁽⁴⁾

そのような事情であれば、ルイスの作品をアレゴリーとする批評家とアレゴリーでないとする作家の間の溝は、なかなか埋まらないであろう。本稿では、ルイスが『ナルニア国物語』を一つの神話として創造したという仮説をたて、ルイスの第一義的な読者であった英国の子ども達のキリスト教に関する知識を推し量りながら、ルイスが『ナルニア国物語』執筆において目指したものを考察したい。

1. C. S. ルイスについて

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis) は1898年アイルランドのベルファストで生まれた。快活で穏やかで情愛あふれる母と、感情の起伏の激しい父のもとに、3歳年上の兄と育った⁽⁵⁾。ルイスが9歳のときに母親が他界し、母の死により兄のウォレンは「幸福な時代の終焉」が来たと同顧し、ルイスは「最も美しい死者に比べれば、最も醜い生者も美の天使である」と母親の死を嘆いた。さらに妻を亡くした彼らの父親は子ども達をどのように扱ったらよいかかわからず、子ども達との関係を悪化させる。そのことを「その数カ月のあいだにその不幸な男は、妻ばかりでなく自分の息子までも本当にうしなってしまったのである」とルイスは振り返る⁽⁶⁾。おそらくは、幼くして母を亡くしたというこの経験が、その後のルイスになんらかの影響を与えていたものと思われる。その後ルイスは兄の通っていたウィニヤード校に入学するも、中退する。この学校は児童虐待で問題となり、数年後に廃校となったのだが、ルイスは後にこの学校を「ベルゼン」、「強制収容所」などと呼んでいた。その後入学したモルヴァーン・コレッジも中退した⁽⁷⁾。

学校という組織にどうしても馴染めないルイスを、父親は自分も習ったカークパトリック教授 (Kirkpatrick) の個人指導に託した。教授は無神論者で、「頭の天辺から足の爪先まで論理でできている」ような人だった⁽⁸⁾。この教授のおかげで、ルイスはギリシア語、ラテン語をすらすら読むことができ、論理的思考力を養うことができるようになった。教授の死を悼んで、ルイスは父親に手紙を書いている。

先生との生活から私が吸収しえたのは、極度に明晰で誠実な思考の雰囲気でした。そして私は生きていくかぎりそのことから利益をこうむり続けることになるでしょう。(中略) 先生の乾いたヒューマー、あのいつもの上機嫌、そして驚くべき精力、こういったものです。私がこういったものを自分の目で確かめたことは、有難いことでした⁽⁹⁾。

おそらく、このカークパトリック教授の印象は、そのまま多くの人々が大人になったルイス自身に対して持った印象と重なるであろうし、教授は『ライオンと魔女』(The Lion, the Witch and the Wardrobe, 1951) に出てくるカーク教授 (『魔術師のおい』(The Magician's Nephew, 1955) のディゴリー少年) のモデルだったと言えよう。「今どきの学校では、何を教えてるんだろう？」というカーク教授の口癖は、カークパトリック先生と、学校教育にいまひとつ馴染めなかったルイス自身の思いが重なったものであろう。またルイスの文学研究者としての優れた資質をいち早く見抜き、父親に助言を与えたのはこのカークパトリック教授だった⁽¹⁰⁾。

教授による2年間の個人指導の後、ルイスは1916年オクスフォード大学ユニヴァーシ

ティ・コレッジに入学する。同大学卒業後の1925年、同モーダリン・コレッジの英語・英文学の特別研究員として着任し、ここでトールキン (J. R. R. Tolkien) らと親交を結び、「インクリングス」という文学集団を結成する。このサークルで彼らは自作の作品を読みあったが、ルイスが『ナルニア国物語』をこの場で読むことはなかったらしい⁽¹¹⁾。

ルイスは1931年に基督教の信仰に入るが、彼は自分を「イギリス中でもっとも不承不承な改心者であった」と回想している⁽¹²⁾。しかしその後、ルイスは熱心な基督教弁証家としてBBCラジオ放送で講演をしたり、多くの基督教の著作を著している。研究分野で絶賛されるほどの業績があるにもかかわらず、このような宗教活動が影響してか、オクスフォードで教授のポストが得られず、ルイスは1954年ケンブリッジ大学モーダリン・コレッジに新設された中世・ルネサンス文学講座の初代教授に就任する。『ナルニア国物語』全7巻を著したのはこの頃で、1949年頃から書き始め1953年には書き終わったと出版社に連絡しているが⁽¹³⁾、ポーリーン・ペインズの挿絵を付して実際に出版されたのは1950年から1956年のことである。私生活では兄と二人暮らし、または戦友の母親との長期に渡る共同生活を経験した後、1956年にアメリカ人ジョイ・ディヴィッドマンと結婚するが、1960年にジョイが他界し、ルイスも1963年、ケネディ大統領が暗殺されたその日に他界した⁽¹⁴⁾。

2. 執筆の背景

ルイスは、中世・ルネサンスの英文学研究の優れた著書*Allegory of Love* (邦題『愛とアレゴリー』玉泉八洲男訳) を1936年に世に出して英文学者としての地位を築き、基督教関係の著作や放送もこなす一方で、SF三部作を著し、次にこのシリーズに着手した。ルイスは、ファンタジーは自分の言いたいことを表す上で、最良の芸術形式だからファンタジーという手法を選んだと言っている。ルイスによれば、子どもの本の書き方には三通りあり、一つは子どもの望むものを与えよ、というものであり、これは好ましくない。もう一つは、特定の子どものむかって話す方法で、これはルイス・キャロルや、ケネス・グレアム、トールキンがとった方法である⁽¹⁵⁾。ルイスは自分のとった方法について以下のように説明している。

三番目の方法は私自身の書きかたで、私にはそういう書き方しか、できないのです。こうした書き方をする人間は、子どもの本が自分のいわずにいられないことを表現する最良の芸術形式だからという理由で、子どもの本を書くのです。ちょうど作曲家が、たとえば国葬や市民葬があるから葬送行進曲を作曲するのではなく、ふと頭に思い浮かんだ音楽的な構想がその形式にもっともぴったりしているから、それを借りるというのに似ています。(「児童書の三つの書き方」)⁽¹⁶⁾

しかし『ナルニア国物語』については、キリスト教色が濃厚であるため、キリスト教的な教化目的で執筆したのではないかという批判がある。そのような批判に対してルイスは次のように答える。

ある人々は私がまず、どうしたらキリスト教について子どもにはなしてやれるかと自問し、それからフェアリー・テールをその手段として用いることに決めたのだと考えるようです。そのうえで児童心理に関する情報を集めてどの年齢層の子どもの対象にするかを決め、キリスト教の根本的真理のリストを作り、そのあげく、それらを具現する“アレゴリー”をでっちあげたのだろうと。とんでもないことです。私はそんな方法ではまったく書けませんでした。すべてはイメージで始まりました。傘を持って歩いているフォーン、櫓に乗った女王、威風あたりを払うライオン。最初はキリスト教的なところさえ、なかったのです。そうした要素は、ひとりでに入り込みました。（「フェアリー・テールについて」）⁽¹⁷⁾

一つのことだけはたしかです。私の七巻の〈ナルニア国ものがたり〉も、三冊のSFも、いくつかの絵を思い浮かべることからはじまったのです。はじめは物語などではなく、単にいくつかの絵でした。〈ライオンと魔女〉はそもそも、雪の森を傘と包みを持って歩いているフォーンの絵で始まったのです。この絵は私の16歳のころから心のうちにあったものでした。そして40歳のころのある日、私はひとりごとをいったのです。「これを物語に書いてみよう」と。（「すべては絵で始まった」）⁽¹⁸⁾

直接的な執筆のきっかけとしては、大戦中にロンドンから疎開してきた子ども達を預かったことがあったが、その子達が全然本を読まないの、それなら面白い本を書いてやろうと思ったというエピソードも伝えられている⁽¹⁹⁾。初めの数行を書きかけたらしいのだが、実際に『ナルニア国物語』に着手したのは、ルイスが50歳を過ぎてからのことだった。また、ルイスは他にも直接的な原因として、ライオンが出て来る悪夢をこの時期によく見たと説明している。しかしもっと深いレベルでは、「ナルニアのような国があって、キリストがこの世でそうしたように、そこでも受肉し、死にそして復活したとしたら、キリストはどんな存在だろうか」という問いへ応えようとするものだと述べている⁽²⁰⁾。

このシリーズに対する批判の第一は、友人トルキンのものだった。トルキンは人と共感することが少なく、友人の作品であれ、友情を差し引いて冷徹な目でその作品を読み批判したのであるが、『指輪物語』の創作に11年以上かかった彼は、そもそも急いで書かれた創作を嫌った。物語に一貫性がなく、ルイスは神話や物語からばらばらに借りてきた

登場人物を使っており、ナルニアをリアルに見せるための「準創造」の努力を怠っているとトルキンは考えた⁽²¹⁾。なるほど『ナルニア国物語』には、フォーンやもの言う獣、サンタクロースや雪の女王などが登場し、さまざまなイメージの寄せ集めという印象を免れ得ず、確かにトルキンの緻密に設計されたリアリティのある準創造の世界とは大きく異なる。ルイスはナルニアをリアルに見せること自体にはそれ程関心がなかったであろう。むしろ、ケルト、ギリシア・ローマ、北欧、ユダヤの神話世界で長らく遊んだルイスの中に蓄えられてきたイメージを紡ぎ合わせたとと言えるだろう。兄と子どもの頃に創った「ボクセン国」の物語に登場するもの言う獣の存在はそのまま引き継がれている。『銀のいす』(*The Silver Chair*, 1953) に出て来る沼人の「泥足にがえもん」や『朝びらき丸東の海へ』(*The Voyage of the 'Dawn Treader'*, 1952) の「のうなしあんよ」などは、ルイスが作り上げたユニークな登場人物である。「すべては絵で始まった」というルイスの言葉は、最終的にできあがった物語を見ると説得力のある説明ではある。さらに神話の影響は登場人物だけでなく、時間の流れ方にも見られる。ナルニアで長い時間を過ごしても、こちら側の世界に戻ってみるとほとんど時間が経っていないというような時間のねじれは、ケルト神話の「オシーン」の物語にも現れるものである。

『ナルニア国物語』には『指輪物語』のような整合性や緻密さは欠けているが、我々の日常とは違う別世界の与える豊かさや楽しみ、醸し出す雰囲気や、そのような異世界が呼び起こす憧れを描くという点で、ルイスは成功していると言えよう。次章では、ルイスが物語を通して読者の心に喚起したかった「憧れ」について詳しく考察する。

3. 憧れ (sehnsucht) について

ルイスの生まれたアイルランドはケルトの文化や神話が息づく地であり、ルイスは子どもの頃から、北欧神話に題材を求めたワーグナー作曲の「ニーベルングンの指輪」やギリシア・ローマ神話に親しみ、神話世界への憧憬を深くしていた。さまざまな文学作品や風景、文学的描写などを通してルイスは憧れの体験をする。それは家の窓から見える丘陵地への衝動的な憧れであったり、ピアトリクス・ポターの『りすのナトキン』における秋の描写への憧れであったりする。その経験をルイスは次のように回顧する。

『秋の観念』としか表現できないものに心をそそられたのである。ある季節の魅力に心を奪われるなどと言うと風変わりに聞こえるかもしれないが、現にそういうことが起きたのである。今度も前と同様に強烈な渴望を経験した⁽²²⁾。

さらには北欧神話の神バルドルの死をうたった次のロングフェローの詩についても、同様の経験をしている。

わたしは叫ぶ声を聞いた。

美しいバルドルは死んだ

バルドルは死んだ…。 (ロングフェロー「テグネールの頌詩」)

わたしはバルドルについて何も知らなかった。しかし私の心は広大な北の空に引き上げられるとともに、(冷たく広く厳しく暗く遠いということばを使うほか) 筆の力では描写することのできぬ世界を、抑えがたいほどに激しく渴望したのである。だがつぎの瞬間には、いつもの場合と同じように、すでに自分がその渴望から離れてしまい、そこに戻りたいと願うばかりだった⁽²³⁾。

バルドルは北歐神話の中で最も美しいと言われる太陽神であるが、若くして死んでしまう。この死にゆく神の存在はキリスト教のイエスにもつながる。人類にとってのエデンの園のようにいったん失われてしまえば、二度と手に入れることのできないものへの憧れが、このような風景描写や文学的表現によって喚起されたと言えよう。『ナルニア国物語』の底辺には絶えずこの憧れが流れている。アスランという偉大で畏れ多い他者への憧れや、『さいごの戦い』に出て来る本当のナルニアへの憧れである。このような憧れは、エドモンドが一度食べると欲しくてたまらなくなる魔法のターキッシュ・デライトが呼び覚ます類の渴望とは質を異にする。それは母を亡くした子どもの母への憧れ、ふるさとへの郷愁、失われてしまった樂園への人類の憧れと同質のものである。ルイスはおそらく彼の物語によって、読者にそのような憧れを引き起すような世界を作り出すことを第一のねらいとしていたのではないだろうか。ルイスが神話や伝説上の登場人物を数多く取り込んだのは、それらの登場人物にすでに付与されている属性やイメージも、そのまま活用したかったからだと考えられる。

それでは、そのような憧れを呼び覚ます世界の創造者であるアスランとは、どのような存在だろうか。

4. アスランとの出会い

アスランによるナルニアの創造が語られるのは『魔術師のおい』においてである。『ライオンと魔女』では、アスランはピーバーによって、「海の彼方の国の大帝の息子」とも「飼ひ慣らされたライオンではない」とも言われる。「アスラン」という名前を聞いただけで、ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシィの四人の子ども達は、それぞれに異なった感情を抱く。ピーターには自信がみなぎり、スーザンは香ばしいにおいや、美しい楽の音に包まれた感じ、ルーシィは夏休みの始まりのような喜びを味わう。しかし兄弟を裏切

ろうとしていたエドモンドは恐れのおにに巻き込まれる。実際にアスランに会った子ども達は畏敬の念を覚える。

けれどもアスランそのひとを、どういいあらわしたらいいでしょう。(中略) ナルニアにいったことのないひとにとっては、あくまで善人でありながら同時にすさまじいおそろしさをそなえたひとというものは考えられません。子どもたちにしても、そんな人があるときかされれば、まるで信じなかったでしょうけれど、このアスランを見ては、いやでもそのことをさとらないわけにいきますまい。子どもたちはアスランの顔を見ようとして、ただ黄金色のたてがみと、何者をもうちひしぐような威厳のある王者の目を、ちらりとあおぎ見たばかりで、あとは、アスランを見つめることができずに、わなわなとふるえてしまったのでした。(『ライオン魔女』158)⁽²⁴⁾

アスランは絶対的な善として描かれているのであるが、イエス・キリストのアレゴリーはなく、あくまでも別世界の創造者であり神であるとルイスは強調する⁽²⁵⁾。『ナルニア国物語』に批判的だったトールキンは、キリストは力強いライオンなどではなく、弱い者と自分を同一化した子羊ではなかったかとルイスを批判した⁽²⁶⁾。しかし、アレゴリーでない以上、キリストと同じ属性をアスランに与える必要はない⁽²⁷⁾。アスランはキリストと似ているから偉大なのではなく、もしも私たちがキリストと出会うことができたなら、どう感じるだろうかという疑問に答えるのが、ルイスの意図だったのではないかと考えられる。

しかし確かにキリストとの類似は見逃すことができない。アスランは絶対的な善であり、死んでゆく王者であり、そして復活する神なのである。このような神のイメージはユダヤだけでなく、他の神話にも共通するものであるが、ここでアスラン像とイエス像を対比してみたい。ルイスにとってキリスト教の核心は何なのかもわかってくるだろう。

アスランとイエスの類似はその死と復活において明白である。他者の罪を贖うべく、罪のない身で殺害される道を自ら選び、そしてその後復活するという点である。白い魔女との約束の場、石舞台で殺されるために誰にも知らせずひとりで向かうアスランの後を、ひそかにスーザンとルーシィが追う。

けれども、ライオンの歩き方は、なんとのおろかったことでしょう！その大きな王者の頭は低くたれて、鼻面が草の葉にさわらんばかりでした。しばらくしてアスランは、つまずいて、低いうめき声をあげました。(中略)「悲しくてさびしいのだよ。あなたがたの手を、たてがみにのせておくれ。そうすればわたしは、あなたがたがそばにすることがわかる。」(186)

この箇所はゲッセマネの祈りをするイエスの姿とも、十字架を背負いきれずに、キレネ人のシモンに代わって背負ってもらうイエス像とも重なり、イエスもおそらく十字架を背負って、よろめき躓いただろうと思わせられる。

それから、イエスは弟子達と一緒にゲッセマネという所に来て、「わたしが向こうに行きながら祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「私は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい。」（新共同訳「マタイによる福音書」第26章36-38節）

その死の瞬間に石舞台が端から端まで真二つに割れたという出来事も、イエスの死の際に神殿の垂れ幕が上から下まで真二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いたという福音書の描写と無関係ではなかろう。

さらにアスランの復活に立ち会ったスーザン、ルーシィの姉妹は、復活のイエスに出会ったマリアら女たちを連想させる。

すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、私の兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこで私に会うことになる。」（新共同訳「マタイによる福音書」第28章9-10節）

ナルニアでは、復活したアスランが二人の姉妹を背中に乗せて、彼女たちの兄弟が白い魔女と戦う戦場へと駆けつけるのだった。

またアスランとナルニアの動物たちの関係はどうだろうか。白い魔女によって石像にされてしまった動物の中にライオンがいた。そのライオンはアスランにより魔女の魔法から解放され命を取り戻すのだが、このライオンの喜びは次のように記されている。

それからアスランを見つめますと、すぐにそのあとを追ってとんでいき、喜びにたえないそぶりで左右にじゃれ、のど声を出して、アスランの顔をなめようとして、とびつきました。(208)

さらにこのライオンは戦陣の先頭にはアスランと彼が立つと聞いて、喜びではち切れんばかりにそのことを他の動物に吹聴して回るのだった。これは、イエスによって癒された

二人の盲人が、そのことを黙っているように命じられたにも関わらず、人々に言い広めた喜びと同質のものであろう。

そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりになるように」と言われると、二人は目が見えるようになった。イエスは、「このことは、だれにも知らせてはいけない」と彼らに厳しくお命じになった。しかし、二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた。(新共同訳「マタイによる福音書」第9章29-31節)

このようにアスランはナルニアを救うために自分の命を投げ出し、古い魔法ゆえに復活して甦り、さらには動物たちを癒す存在として描かれている。しかし、アスランのもう一つの最も重要な役割は、エドマンズの救済であろう。

5. エドマンズの成長

ファンタジーはさまざまに定義されるものである。佐藤さとるによれば、ファンタジーという外来語が文学用語として日本で使われるようになったのは、石井桃子他著の『子供と文学』(中央公論社、1960年)の刊行以後だという⁽²⁸⁾。しかしファンタジーが、「空想」「とりとめのないこと」としてとらえられていることについての懸念を、石井を引用しながら、佐藤も表している。さらに、佐藤は、ファンタジーという言葉はいまいに、「怪談、童話、伝説、伝奇物語、SFからパロディ、どうかすると神話や寓話のようなものまで含めた、大変に広義な使われ方をしてきた」と指摘し、このような用法は現在でも生きており、有用でもあると言う⁽²⁹⁾。最近の批評では、脇明子が魔法ファンタジーの特徴的な要素として、以下の四つをあげる。それは「魔法」「善と悪との戦い」「神話、伝説、昔話などの伝承文学から、人物、モチーフ、エピソードなどを借りているものが多い」ということ、「物語の舞台として、別世界をまるごと作っているということ」である⁽³⁰⁾。四つ目の要素の例として、脇はトールキンの『指輪物語』を挙げている。

さて、『ナルニア国物語』はこれら四つの要素すべてを備えているのであるが、「善と悪との戦い」という観点から、エドマンズを考えてみたい。『ナルニア国物語』には、『ライオンと魔女』で登場したピーター、スーザン、エドマンズ、ルーシィ以外の子ども達も、各々の物語の主人公として登場する。その子ども達は必ずしも魅力的な優等生ではないが、ナルニアでの困った出来事を解決する手助けをすることを通して、成長していくのである。『ライオンと魔女』では、最初にナルニアを訪れたのが末っ子のルーシィであることから、ルーシィが四人兄弟の中でもっとも作者の共感をこめて語られているとの印象を受ける。しかし、この物語をファンタジーとして読む場合、もっとも目覚ましい成長を遂げるのは、

白い魔女の魔法のお菓子によって騙されてしまったエドモンドであろう。

エドモンドは四人兄弟の三番目で、兄弟の中で少し窮屈な思いをしている。そこで妹のルーシィに意地悪をしたりするのであるが、ルーシィがナルニアの話をし、自分も妹とは別の機会にナルニアに行ったにもかかわらず、ルーシィの言うことを他の兄弟に本当だと言うことはしなかった。彼らの父親は大戦に従軍しており、子供たちだけでロンドンから疎開していたという事情もあり、彼らの長兄ピーターが弟妹を仕切ろうとするのであるが、エドモンドはそれにも反発を感じている。彼らの状況を、精神療法を中心とする内科医ポール・トゥルニエの定義する子どもから青年への発達段階に照らし併せて考えると、見えてくることがある。

道徳的観点から見て子供の特徴をなしているものは、すでに見て来た通り、両親への依存と、両親によってはっきりと教えられた規律への欲求です。子供にとって善とは、両親が許してくれることで、それをすれば両親がほほえんでくれ、愛撫してくれるものであり、悪とは両親が禁じていることで、それをすると叱られるようなこと、すなわち不安の源なのです。子供の罪責感、両親の愛を失うのではないかという不安から生まれます⁽³¹⁾。

親元を離れて疎開しているペベンシー兄弟にとって、善悪の規範を示してくれる親は不在である。彼らの中でもめ事を解決しようとするものの、なかなかうまくはいかない。それが、ナルニアに期せずして飛び込むことにより、兄弟はひとりひとり成長していくのであるが、一番困難な道を通して成長するのがエドモンドである。ナルニアという異世界で、彼らは善と悪の戦いを目の当たりにするのであるが、白い魔女側につくエドモンドには当然のことながら、なぜ皆はライオンが善で、自分にお菓子をくれた女王と名乗る人が悪であるとするのか理解できない。

青年にとっては、善と悪、正しい人と悪い人というはっきりと二つに分かれた陣営があると思われるのです。(中略)しかしやがては…この世では悪が善と分かちがたく入り混じっており、どんなに正しい人でも過ちがないなどということはありませんし、徳のひとかけらも持ち合わせないような悪人などというものはいないということ、および、自分自身の内部に善も悪もあること、自分が持っているなどと夢にも思っていなかった善い能力や、自分は持っていないと言い張っていた欠点、自分が内部に現実に存在していることを認めざるを得ない日がやって来るでしょう。そして、自分の〈影〉の部分をも含めた自己全体を受け入れることによってのみ、自分が人間として完全に発展し開花することができるのだ、ということ、を会得する日が来るでしょう⁽³²⁾。

英国の『ガーディアン』紙のコラムニストは、『ナルニア国物語』を「豊かな想像力に裏打ちされた卓越したファンタジーと、一方で宗教的寓意を振りかざす不愉快な部分とが同居する物語だ」と批判する⁽³³⁾。そしてアスランによる救済の場面では、「可哀相なエドモンド少年は、キリスト教お得意の罪の意識なるものを嫌というほど刷り込まれる」と皮肉る⁽³⁴⁾。脇明子もこれほど激しくはないにしろ、「子どもらしいちょっとしたあやまちと、「絶対悪」に類する恐ろしい悪とが、しばしばストレートに結びつけられてしまう」と違和感を表す⁽³⁵⁾。エドモンドのやったことはそれほど罪が重いのか？という批判であろう。ちょっとした妹にたいする意地悪、父親ぶる兄への反発、白い魔女が魔法で出してくれるお菓子への欲求、子供ならよくあることではないかということだ。しかし、ルイスはちょっとした意地悪や利己心、反発、裏切りという一つ一つの行為よりも、その裏にあるエドモンドを裏切りに走らせる、もっと潜在的な傾向を示していたのではないか。魔女との戦いに命をかけて臨んだエドモンドは重傷を負い、ルーシィがサンタクロースにもらった薬で癒される。

エドモンドはしゃんと立ち上がっていて、傷がなおったばかりか、今まで長い間、つまりエドモンドが悪い子になりはじめたあのいやな事件いらい、見なれてきた兄よりも、ずっと丈夫そうなようすをしていました。そればかりか、まちがったことをしてかして、いたい教えをうけたために、まえよりもふんべつがつき、きまじめになったようで、いまはエドモンドもいい子にもどり、みんなの顔をちゃんと見ることができました。
(223)

と訳されている箇所である。しかし原文を見るとこの描写は少し違っている。

エドモンドはしゃんと立ち上がって、傷がなおったばかりか、今まで何年も、見慣れてきた兄よりもずっといい顔をしていました。実際、エドモンドが悪い子になりだしたあの恐ろしい学校での第一学期以来のことです。彼はもとのエドモンドにもどり、みんなの顔をちゃんと見ることができました。(筆者訳)

要するにルイスはエドモンドの傾向を、ナルニアに来るよりずっと前からのもので捉えていたのである。「いたい教え」も「ふんべつ」も「きまじめ」も「いい子」も原文にはない。それは表層のことであり、エドモンドの意地悪もその傾向の結果として現われたに過ぎない。肝心なことはエドモンドがみんなの顔をまっすぐに見ることができるようになったということである。すなわち、彼は意地悪や裏切りから自由になったのであり、

もはや闇に与することはなく、光をまっすぐに見ることができるのである。トゥルニエを引用すれば、彼は「自分の〈影〉の部分をも含めた自己全体を受け入れること」ができたのであり、人間として大きく成長したのである。このような体験をしたエドモンドは『朝びらき丸東の海へ』で、従兄弟のユースチスにアスランのことを次のように説明する。

あのひとは、偉大なライオンで、海のかなたの国の息子でね、ぼくを救い、ナルニアを救ってくれたんだよ。(138)⁽³⁶⁾

アスランの死を目撃したスーザンとルーシは、ライオンがエドモンドのために惨めな死に方をしたということのエドモンドにあえて告げないでいた。しかしエドモンドは自分がアスランによって救われたということをはっきりと自覚している。ナルニアへの冒険はエドモンドのためにあったと言っても過言ではないだろう。

このような主人公や主人公に準じる人物の成長は、『ナルニア国物語』の他の作品にも共通してみられるテーマである。そもそもペベンシー家の子供達達の疎開先の主人であるカーク教授となった『魔術師のおい』のディゴリー少年も、ナルニアの創造に立ち会ったのであるが、病気の母親に不老不死のりんごを持っていけという誘惑に遭う。自分自身のためならその香りがどんなに食欲をそそるものであっても、ディゴリーには我慢できるのだが、「母さんのために」というのは、大きな試練だった。しかし友を裏切ることまでそそのかす誘惑者の一言で、ディゴリーはその誘惑をはねつけることができた。従って結果的に、アスランの許しを得て、新たに母親のためにりんごをもぎ取るのだった。実は、このりんごの実の種が捨てられ、そこから生え出たりんごの木が後に大風にあって折れて切り倒された。その材木でナルニアへ通じる衣装ダンスが造られたのだった。エドモンドにしても、ディゴリーにしても試練を通して、絶対的な善と出会い、自分の中の善も悪も、強さも弱さも受け入れて成長したのである。

おわりに

ルイスはファンタジーや神話を「具体的でありながら一般性をもち、単なる概念とか、個々の経験でなく、ありとあらゆる経験を人の感知しうる形で示し、不適切なものを惜しげもなく振り捨てる」と定義し、その種の最良のものは、読者に「彼がいまだかつてしたことのない経験を与えることができ」、それによって「“人生を解説する”代りにより多くの風味を加える」と言う⁽³⁷⁾。

『ナルニア国物語』は、ファンタジーというジャンルの中でも特異な存在であろう。死に、そして甦る絶対者が登場するという点で、それは神話的である。キリストの受肉によって神話が歴史となったとするルイスの解釈に基づいて考えれば、神が人として生まれ歴

史に足跡を残し、そして天に上げられた世界（現実世界）と、神が現実存在する神話世界（ナルニア）の行き来を可能にするエヴリデイ・マジック⁽³⁸⁾の手法をルイスが部分的にとり入れたのは、妥当であろう。それは一貫して物語が別世界で進むハイ・ファンタジーの形式をとったトールキンの準創造とも多少質が違うようだ。ルイスの試みは『ナルニア国物語』によってキリスト教の教えを子ども達にわかりやすく伝えることではなく、現実世界とはまた違った別世界で死に、また甦った絶対的な善である存在を描き、その善に触れえた子ども達の心に沸き起こる畏怖の念や喜びを再現することだった。そのみならず、善良なもの言う獣の暮らすその別世界のかもしれない出づる雰囲気、においや温度―ルイスの言葉を借りれば「風味」―を読者に運ぶことだった。

ルイスはこの作品において、もっとも自分の伝えたかったことを、描きたかったイメージを紡いで描いたのであろう。魔法で解決するなどということ筋を進めるのではなく、読者とかわらない普通の子も達が、迷ったりひるんだり、たしなめられたりしながらも、知恵と勇気をしばって進んでいく姿に共感した子どもや大人は世界中にたくさんいた。『ナルニア国物語』の読者はキリスト教との類似性をも読みとるであろう。しかしこの物語を読んで、登場人物を聖書中の登場人物やキリスト教の教えに関連づけて読み替える必要性はまったく感じないであろうし、アスランはキリストから独立したものとして、独自の光に照らして偉大だと感じられるだろう。そのような意味で、ルイスがアレゴリーではなく、ひとつの神話としてナルニアを創造したということにも頷けよう。

註

- (1) 本稿は、2006年7月6日に行った敬和学園大学主催新発田市オープン・カレッジ『「ファンタジー」―大人が読む児童文学―』での講演『「ナルニア国物語」―キリスト教的世界観を中心に―』を基に執筆したものである。
- (2) ポリー・トインビー『ガーディアン紙』所収、『クーリエ・ジャポン』第8号（2006年3月）、67。
- (3) C. S. Lewis, *God in the Dock*, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1970) 66.
- (4) C. S. ルイス、中村妙子訳『別世界にて』みすず書房、1978/1991、98。
- (5) 山形和美「C. S. ルイスの生涯と作品」、山形和美編著『C. S. ルイスの世界』こびあん書房、1983年、6-7。
- (6) Ibid., 9-10.
- (7) Ibid., 10-12.
- (8) Ibid., 15.
- (9) Ibid., 17.
- (10) Ibid., 17-18.
- (11) Ibid., 34.
- (12) Roger Lancelyn Green & Walter Hooper, *C.S.Lewis: A Biography*, New York: Harcourt

- Brace Jovanovich, 1974, 103.
- (13) Humphrey Carpenter, *The Inklings*, London: Unwin Paperbacks, 1981, 222-227.
- (14) 山形, op.cit., 52-55.
- (15) C. S. ルイス, op.cit., 42.
- (16) Ibid., 43.
- (17) Ibid., 64.
- (18) Ibid., 73-74.
- (19) プライアン・ジブリー, 中村妙子訳『ようこそナルニア国へ』岩波書店, 1992/2005年, 23-24.
- (20) Carpenter, op.cit., 223.
- (21) Ibid., 223-224.
- (22) 柳生望『ナルニアの国は遠くない』新教出版社, 1981/1982, 15.
- (23) Ibid., 15-16.
- (24) C. S. ルイス, 瀬田貞二訳『ライオンと魔女』岩波書店, 1966/1989年。テキストの引用はすべて本書による。
- (25) Carpenter, op.cit., 223.
- (26) トインビー, op.cit., 68.
- (27) ただし『さいごの戦い』でアスランが子羊に姿を変える場面がある。これはトールキンの批判を踏まえてのエピソードであろうか。
- (28) 佐藤さとる『ファンタジーの世界』講談社現代新書, 1978年, 60-61.
- (29) Ibid., 61.
- (30) 脇明子『魔法ファンタジーの世界』岩波新書, 2006年, 34-35.
- (31) ポール・トゥルニエ, 三浦安子訳『人生の四季』ヨルダン社, 1970/1978, 50-51.
- (32) Ibid., 52-53.
- (33) トインビー, op.cit., 66-67.
- (34) Ibid., 68.
- (35) 脇, op.cit., 93.
- (36) C. S. ルイス, 瀬田貞二訳『朝びらき丸東の海へ』岩波書店, 1966/1972年。
- (37) C. S. ルイス『別世界にて』, 67.
- (38) 小谷真理はファンタジーを定義して、「現実世界を舞台にして、そこに超自然な力が侵入するさまを描いているのが、ロー・ファンタジーである」とする。ロー・ファンタジーはエヴリデイ・マジックとも呼ばれる。これに対して、終始異世界を舞台にするものがハイ・ファンタジーである。小谷真理『ファンタジーの冒険』ちくま新書, 1998年, 10-12.